

東北農政局長賞受賞

新住民や後継者が住みたい地域へ

～りんごと郷土芸能によるむらづくり～

くろかわのうかくみあい

受賞者 **黒川農家組合**

いわてけんもりおかし
(岩手県盛岡市)

■ 地域の沿革と概要

黒川地区がある盛岡市は、岩手県の内陸部、北上盆地の北部に位置し、東は北上山系、西は奥羽山系の山々に囲まれている。この山地間を北上川が南流し、東西の山地に水源を有する雫石川、中津川、築川などの支流が一大水系となって市街地の中央部を貫流している。

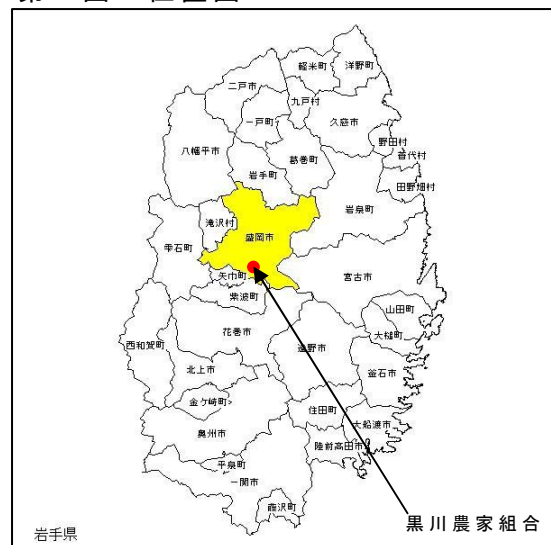
気候は、寒暖の差の激しい典型的な内陸性気候で、降雪量はそれほど多くはないが、冬は本州の県庁所在都市では一番といわれるほど寒さが厳しい地域である。

一方、市域は平成4年に都南村、平成18年には玉山村と市村合併したことにより拡大し、全体面積は88,647ha、うち農地が約10,827ha（約12%）、山林や原野が約67,329ha（約76%）となっている。

農業をみると、北上川流域南部の東岸では起伏の多い丘陵地帯での果樹栽培、西岸では平坦な地形を活かした水田作が展開されている。また、北上川流域北部では水田作や畑作のほか、畜産が盛んに行われており、平野部から山間部では飼料作物が多く栽培されている。

人口は約30万人で、岩手県の人口の約2割を占めている。産業別従事者の

第1図 位置図



※ 白地図 kenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	大字単位の集団	
組織の性格	機能的な集団	
農家率 (内訳)	7.1%	
	総世帯数	986戸
	農家数	70戸
販売農家数 (内訳)	55戸	
	専業農家	9戸
	1種兼農家	13戸
	2種兼農家	33戸
主要作目 (作付面積等)	水稻	2,060 ha
	りんご	526 ha
	野菜	ha
農用地の状況 (内訳)	耕地計	110.9 ha
	田	37.4 ha
	畑	73.5 ha
	樹園地	0 ha
	耕地率	25%
	農家一戸当たり農用地面積	1.6 ha

割合は、第1次産業が4.2%、第2次産業が14.2%、第3次産業が80.9%と、就業者の約8割が一般卸売・小売業やサービス業に従事しており、商業・消費都市としての性格が強い市である。

また、県内第一の消費地であるとともに、県内主要交通の中心に位置することや、市内に中央卸売市場があり、農産物集出荷の拠点としての条件に恵まれていることから、自然条件や地理的条件等を活かした多様な農業生産が行われており、きゅうりやトマト、ねぎなどの野菜のほか、りんご栽培が盛んで市場評価も高く、関東や関西方面を中心に全国販売されている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

黒川農家組合がある黒川地区は、北上川流域南部の東岸に位置し、比較的温暖な気候に恵まれていることから、古くから平坦地では水稻栽培、緩やかな傾斜地では果樹栽培が行われている。

また、農作物を育てるための豊かな水源を保全するため、250haの共有林の保全管理活動を行っており、間伐材の販売収益と土地の貸料から得られた資金で集会施設や消防設備を整備するなど、「地域を自分たちで創る」意識が高い地域である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 都市化の進展による地域コミュニティの停滞等

黒川地区は、かつてはほとんどが農家という純農村地域であったが、昭和50年代に入ると宅地開発が進み、昭和60年代には都南中央橋、都南大橋が北上川に相次いで架橋され、国道4号とのアクセスが向上したことによって、急激に非農家世帯が増加した。平成17年の国勢調査では全世帯数986戸(2,859人)のうち農家戸数は70戸(330人)となっている。

このように、短期間に都市化が進展したことによって、農薬散布や農作業の騒音等の問題の発生、地域コミュニティ活動の停滞など、新たな問題を抱えることとなった。これらの問題を解消するため、昭和60年頃から黒川農家組合の農家が中心となり、非農家も含む地域が一体となったむらづくりに取り組み始めた。

イ 新しい地域コミュニティの形成

むらづくりに取り組むにあたっては、新しく何かを始めるのではなく、地区の農家が昔から取り組んできた地域活動に非農家世帯の参画を呼びかけることにより解決を図ることとした。

具体的な活動としては、当地区に古くから伝わる郷土芸能「黒川さんさ踊り」と「黒川田植え踊り」の伝承活動や共有林の保全管理活動などを、黒川農家組合の農家が中心となって実践しており、非農家世帯を巻き込みながら活動を重

ねることで相互理解が深まり、新しい地域コミュニティが形成されている。

ウ 住民が一体となったむらづくりの展開

平成11年には、地区のりんご農家と非農家住民、消費者との交流を目的に、「りんご畑 de コンサート」が開催され、現在も地域の住民が協力・交流する行事として定着している。

また、非農家住民の発案で、地区を流れる美濃戸川みのとの清掃に取り組み始めたほか、これまで当地区の祭りは館林神社たてばやしの例大祭しかなかったが、児童センターの夏祭りを開催し、地区のお祭りとして定着させた。

そのほか、地区に4つある自治公民館の活動は非農家住民が主体となり、三世交代の餅つき大会や地域の清掃活動を行っている。

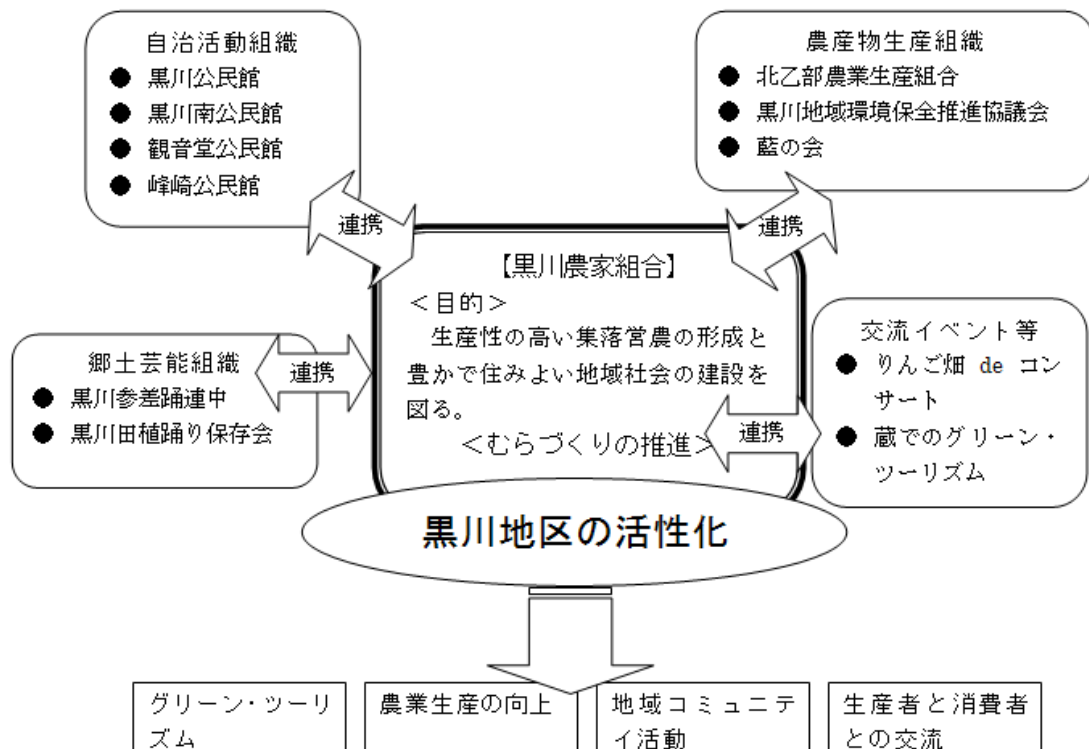
これらの活動を通じ、農家と非農家の枠を越えた地区住民が一体となりながら、当地区の活性化に向けた取組みを展開している。

(2) むらづくりの推進体制

黒川農家組合の農家が核となって取り組んでいるこの地区のむらづくりは、それぞれの目的によって作られた以下の4組織と4つの自治公民館が役割を分担し、連携しながら進めている。

また、郷土芸能継承団体や自治会活動とも連携をとり、多面的な活動を展開して地域社会全体の発展に寄与している。

第2図 むらづくり推進体制図



ア 黒川農家組合

生産性の高い集落営農の形成と豊かで住みよい地域社会の建設を目的とし、りんごや水稻の栽培指導会などを実施している。

特にりんごにおいては、岩手県農業研究センターなどの研究施設や、県内外の圃場への視察研修などを行い、地区全体の栽培技術の向上に取り組んでいる。

そのほか、地域住民との交流を図ることを目的として、とうもろこしやそばの栽培・収穫、ジャム作り、そば打ちなどの講習会を開催し、明るい地域社会を作る活動に取り組んでいる。

イ ^{きたおとべ}北乙部農業生産組合

今から 45 年前に、盛岡市で最も早い時期に組織された共同防除組合で、共同防除や栽培技術研修に取組み、当地区にりんごの栽培を普及させた。

農薬散布や受粉に利用するマメコバチの増殖方法等をテーマとした若手生産者の研修会を行うなど、黒川農家組合とも連携しながら、当地区のりんごの生産振興と、積極的な後継者の育成・確保に取り組んでいる。

ウ 黒川地域環境保全推進協議会

「農地・水・環境保全向上対策事業」の導入に当たり、平成 19 年に組織され、黒川農家組合と連携し、地区の農地・農業用水等の資源や環境の保全活動を行っている。

具体的には、地域住民が共同で水路の草刈りや泥上げ、農道の砂利補充等を実施しているほか、景観形成への認識を高めるための広報活動や花壇作り、ため池の清掃活動などを行っている。

エ ^{あい}藍の会

ハーブを活用した害虫防除に取り組むことを目的に、ブルーベリーを栽培する地区の女性農業者達によって平成 8 年に結成された。

ブルーベリーの栽培技術の研修会を行うなど、生産技術向上に向けた取組みや、虫害を受けたブルーベリーの活用方法の研究を行うなど、資源を有効活用した商品開発の取組みを行っている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

黒川地区は、かつては純農村地域であったが、昭和 50 年代以降の宅地開発等により急激に非農家戸数が増加し、短期間に農村集落の環境が大きく転換した地域である。

概して、こうした都市化の進展による混住化は、住民の合意形成を難しくすると言われている中、当地区では、郷土芸能の伝承活動や地域の清掃活動など、「昔から行ってきた地域活動に新たな住民を巻き込む」ことにより非農家との相互理解を深め、新たな地域コミュニティの形成を図っており、地域課題の解

決に意欲的に取り組んでいる。

この実践に当たっては、黒川農家組合が中心となり、地区の特産品であるりんごの生産を手がける「北乙部農業生産組合」、農地・水・環境保全向上対策を活用して地域資源の管理を進める「黒川地域環境保全推進協議会」、女性農業者で結成された「藍の会」といった組織が役割分担しながら取り組んでいる。

2. 農業生産面における特徴

ア 高い評価を受けるりんご栽培

黒川地区は、県内一のみりんご産地である盛岡市の中でも早くからりんごの栽培を始めた地域で、西日が当たる緩い斜面がりんごの栽培に適していることもあり、35戸の農家で約40haのみりんごが栽培されている。

県内でいち早くりんごの共同防除組合を組織し、黒川農家組合が中心となって地区全体の栽培技術向上に努めてきた結果、全国果樹技術経営コンクール全国農業協同組合連合会会長賞、岩手県純情りんごコンテスト最優秀賞などの受賞者を数多く輩出している。

また、「盛岡特産品ブランド（確かな品質・確かな技術を伝える盛岡生まれの地場産品の証として、特産品の種別ごとに定める基準により認証する制度）」の一つである「盛岡りんご」の認定を受けている15事業者のうち、5事業者が黒川農家組合の組合員となっているなど、黒川地区で生産されたりんごは、地場市場から「黒川りんご」とも呼ばれ、高い評価を得ている。



写真1 りんご園の風景

イ りんごの栽培技術を活かしたブルーベリー栽培

当地区のブルーベリー栽培は昭和62年頃に導入され、10戸の農家で約5ha栽培されている。生産者の多くがりんごも栽培しており、りんご栽培で培った果樹作りのセンスと販売方法をベースにレベルの高い産地となっている。

平成8年には、地区の女性農業者達が「藍の会」を立ち上げ、ハーブを活用した害虫防除に取り組むなど、女性農業者を中心とした生産・商品開発が行われており、平成9年度には岩手県内の青年農業者等が一堂に会して活動実績発表等を行う「アグリネットワーク'97」において「ハーブで魅力アップ！安全なブルーベリー栽培を目指して」と題した研究発表を行い、岩手県最優秀賞を受賞している。

また、平成14年に岩手県を会場に開催された「第8回全国ブルーベリー産地シンポジウム」では、県内でもトップクラスの面積、生産を行っている当地区の生産者の園地が視察先となった。

ウ 耕作放棄地解消への取組

耕作放棄地の解消に向けて、黒川農家組合では地域の農業委員と連携しながら、担い手への農地の集積に努めており、地区内の認定農業者が当該農地を購入してりんごの作付けを行っている。

なお、農地の再生に当たっては、耕作放棄地再生利用交付金を活用しており、盛岡市における交付金を活用した耕作放棄地解消の最初の事例となっている。

エ 後継者の育成・確保

黒川農家組合では、主力品目であるりんごについて、栽培技術の向上を図りながら若手生産者の育成・確保に努めている。

なお、当地区には、岩手県農業農村指導士が3名、そのOBが1名いるなど、地域内に農業技術指導を行える人材が揃っており、新規就農者の受け入れ態勢が整っている。

これらにより、全国的に農業後継者の不足が叫ばれる中、当地区では後継者のいる経営体が多く、また、サラリーマンをやめて農業に就業する事例も多く見られる。

3. 生活・環境整備面における特徴

ア 伝統芸能の伝承活動の展開

当地区では、地区の子ども達を対象として、盛岡市指定無形民俗文化財に指定されている「黒川さんさ踊り」と「黒川田植踊り」の二つの伝統芸能の伝承活動に取り組んでいる。

例年、8月17日に開催される地区の^{たてばやし}館林神社例大祭では、この黒川さんさ踊りと黒川田植踊りの二つの踊りが奉納され、首都圏からも多くの見学者が訪れている。これらの伝統芸能の伝承活動が、地域住民間の交流、そして都市住民との交流の機会となり、当地区のむらづくりの一翼を担っている。

① 黒川さんさ踊り

黒川さんさ踊りは、往時は一家の長男にしか伝承しないとされ、厳格な伝統が頑なに守り継がれていたが、戦争により一時途絶えていた。これを、かつての踊り手たちが奮起して昭和43年に復活させ、その後、黒川農家組合の農家が中心となり、非農家の住民と一緒に地域の小学生等への伝承活動を続けてきた。

現在では、学校行事に「郷土芸能発表会」が組み込まれるなど、地域の踊りとして定着しており、黒川さんさ踊りの保存団体である「黒川参差踊連中」^{くろかわさんさおどりれんちゆう}によって地区の保育園、小中学校の子ども達への伝承活動が行われている。



写真2 黒川さんさ踊り

によって地区の保育園、小中学校の子ども達への伝承活動が行われている。

さらに、黒川参差踊連中の活動として2年に一度、全国に約200人いる愛好者を盛岡に招待して合同練習会を開催している。黒川参差踊連中のメンバーの家に宿泊をしながら踊りを練習するほか、農業体験も行うなど、伝承活動を通じて都市住民との交流も盛んに行っている。

そのほか、平成12年にはフランス政府からの招聘を受け、フランスのリヨンで開催された「リヨン・ダンス・ビエンナーレ」で公演したほか、ロシア、韓国からも招かれて公演を行うなど国際的にも活動している。

② 黒川田植踊り

黒川田植踊りは、明治初期より小正月を中心に盛んに行われていたが、明治40年を最後に長らく中断されていた。しかし、昭和43年に地元の有志が「黒川田植踊り保存会」を結成し、見事に復活を果たし、現在は地元の中高生を中心に踊りを指導し、伝承活動に努めている。

保存会は、平成15年に岩手県から推薦を受けた6団体の一つとして国民文化祭に参加したほか、伝承活動に取り組んでいる乙部中学校が平成15年に全国中学校総合文化祭に参加するなど、現在では地区の伝統芸能として定着している。



写真3 黒川田植踊り

イ りんご畑 de コンサート

当地区は、りんご栽培の盛んな地域であるが、近年は急速に宅地化が進み、畑のすぐそばに住宅が建てられ、新しい住民が増えた。こうした地域事情の中、りんご畑の良さをPRし、また、新旧住民のコミュニケーションを図ろうと、平成11年に、地区のりんご園を活用して「りんご畑 de コンサート」を開催した。

最初は数名の地元農家と趣旨に賛同する団体や企業が中心となって開催したが、回を重ねるごとに賛同者が増え、今では地元農家や住民50名以上で実行委員会を結成し、非農家住民を含めた協力体制が作り上げられている。

これまでの10年間で5回コンサートを開催しており、今では、農家と地域住民及び都市住民との交流の場として、地区を代表するイベントの一つとなっている。



写真4 コンサート風景

ウ 蔵に泊まる農家民泊

当地区には、「いわてグリーン・ツーリズム体験インストラクター」の認定を受けた農家があり、自宅脇にある土蔵を改築した宿泊施設を開設している。

りんごの葉摘みや収穫などの農作業体験や郷土芸能の踊りの講習会を行うなど、農村生活を体験できる機会を提供しており、国内のみならず、アメリカ、韓国、スリランカ、ロシアなどの海外からも体験者が訪れ、国際的な交流に発展している。



写真5 土蔵を改築した宿泊施設